

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

# 中の原・古屋敷遺跡

1976

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

中の原・古屋敷遺跡

1976

伊那市教育委員会  
南信土地改良事務所

## 序

昭和 50 年度西部開発事業（西箕輪地区）の一環として、伊那市西箕輪中の原遺跡、古屋敷遺跡の発掘調査が 11 月上旬から 12 月上旬にかけての一ヶ月間にわたって実施されました。

この西箕輪は、木曾山脈の北部経ヶ岳山麓より広がる扇状地上に、また小沢川左岸段近の二つの自然的条件の重なった地域で、発掘当初より水利の点で、重要視の度合いが少なかった。このような理由、あるいは開発の遅れ等で、発掘調査されず、未知の点が多くあったが、今度、西箕輪地区に於ては初めての発掘調査となり、考古学的なメスが加えられ、わずかな光明を投げかけてくれた。

次に二つの遺跡の成果等を簡単に述べてみたいと思う。発掘調査地域が限定されたので、本質的な究明はできなかつたが、それでも出土遺物等の理由からある程度の解説が可能となつた。中の原遺跡では平安時代の住居址 2 軒、出土遺物としては土師器、須恵器、灰釉陶器が、また古屋敷遺跡としては繩文中期時代の土括 1 基、繩文中期土器片等を獲ることができた。

報告書刊行に当つて、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた南信土地改良事務所職員一同、寒さの厳しい 11 月～12 月にかけて、この調査に精勤された友野良一団長を始めとする調査団の各位、この調査に御協力いただいた地元作業員関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和 51 年 3 月 10 日

伊那市教育委員会

教育長 松 沢 一 美

## 第Ⅰ章 まえがき 中の原、古屋敷遺跡の環境

### 第1節 位 置

中の原遺跡は、長野県伊那市西箕輪中条部落、古屋敷遺跡は西箕輪羽広地区に所在しています。遺跡地までのルートとして、中の原遺跡は伊那市街地より、西方へ、国道136号線に沿って約4km程さかのばると椎兵衛峠の玄関口である与地部落に至る。この附近で同道と別れて、北へ約1km程行くと、南中条のバス停留所と火の見がみられる。この位置に立ち留まって、視野を南東に向かう位置が中の原遺跡である。

古屋敷遺跡は伊那市街より西へ向って、大萱、荒井線を約3km程遡ると信州大学農学部の白い校舎が目に映える。さらに1km程登ると、西箕輪中学校に達し、ここから与地、辰野線を北へ約1.5km行くと、羽広の集落が点在している。当遺跡地は羽広の南に位置している。正確な名称は伊那市西箕輪羽広区古屋敷である。

### 第2節 地 形・地 質

西箕輪は、如何なる地形、ならびに地質に位置するかを考えてみると、伊那市においては最も眺望の優れた場所に属していると思われる。西箕輪の支所附近にて、パノラマ状に視野を展開してみると次のようになる。東方にひとときわけわしく聳える赤石山脈の主峰の一つである仙丈ヶ岳、駒ヶ岳（甲斐駒ヶ岳）があり、その前方に南北に走る伊那山脈が通じているこれらの山脈の間を三峰川が流れ、最後に、天竜川と合流するのである。天竜川については各種の文献等で詳細に述べられているので、今回は省略しておくことにしておこう。

西側に目を転じてみれば、南北に連なる山脈の一帯が存在し、その主峰は木曾郡と上伊那郡との境界線である糸ヶ岳である。この麓は、次第に東南に傾斜して、天竜川河域に至って東方、高遠、手良、箕輪等のそれと合致する。

西南の方角に高くみえるのが、駒ヶ岳の前方の将基頭である。この山の右の傾斜と、経ヶ岳の左の傾斜の合わさる低い地点が椎兵衛峠であり、ここは民謡『伊那節』の節にみられる。駒ヶ岳の山麓に展開している集落が、横山、内の萱、大坊、平沢、小沢である。椎兵衛峠付近より流出

する水を集めて、小河川を成しており、これが小沢川で、東流して天竜川と合流して太平洋に注ぐ。

次に西箕輪地区内に限定した地形ならびに地質については、明治35年7月20日発行、長野県上伊那郡西箕輪村尋常小学校長、小林茂理編（わが郷土）を全面的に引用させてもらうことにした。それによると、『細かに観察すれば、自ら三個の大区域に分けて居る。

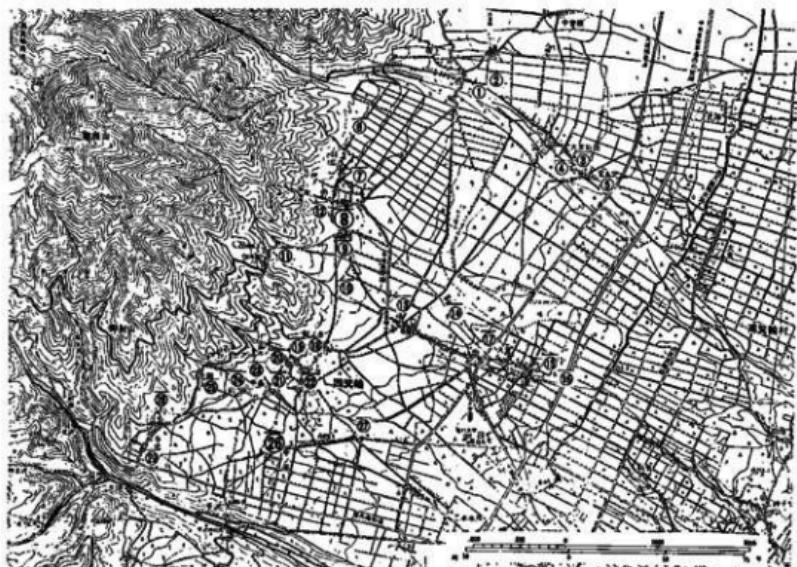
（1）を大泉所傾斜地、（2）を藏鹿傾斜地、（3）を御射山傾斜地と名を付けようと思う。一体、山は遠方より見れば、摺鉢でもふせたかのように、その傾斜がすらりと削り成したるよう見ゆれども、近きて之えを見れば、実はなかなかさようではない。いくつかの谷が峯に集り、ひだをなして出来て居る。吾が経ヶ岳も、矢張其通りである。我が学校に面したる谷のつまりは、経ヶ岳の内、字藏鹿の嶺で、この傾斜の広がりたる区域は、羽広、大豊の両部落を載せもちて、東南に走り、南箕輪村と伊那町とにつづき、遂に天竜河域に至り、高遠方面の西方に走れる傾斜に合して居る。これが即ち、藏鹿傾斜地である。また、藏鹿の西南に向へる谷、即ち字御射山の傾斜は、上戸、中条、与地の3部を載せつつ西南に走りたるも、南方駒ヶ岳の傾斜の北向する勢力に推され、茲に方向を東北に取り、藏鹿より東南向する傾斜と合し、更に東向して走りたるかのように思はる。之を御射山傾斜地と名けよ。一も一つ、藏鹿の嶺の北に於て、東北に開きたる大なる谷がある。これを大泉所と言う。この傾斜は、吹上、大泉新田、中曾根の三部を載せて、南、中の両箕輪に入り、天竜河域に至り、箕輪、東箕輪等の西向せる傾斜に出逢ふて居る。これが即ち大泉所傾斜地である。……そして、此大泉所の谷々より集り来る水は、時に或は暴張して、急端直下、両岸を削り土砂を洗ひて、恰も蛟龍の渓谷を出でて、天竜と喰み合う如き猛勢を以て東奔するから、山麓にては、幅数百間、深さ数十丈の河原をなして居る。之を大泉川と言ふて、藏鹿傾斜と大泉所傾斜と合するあたりを、南北に中断して居る』

### 第3節 歴史的環境

歴史的環境についての節は一般的な説明を加えるよりも、第1図と、第1表をもって理解してもらうようにしたので御承知願いたい。

（小池 政美）

第Ⅰ章 まえがき 中の原、古屋敷遺跡の環境



第1図 西笠輪地区遺跡分布図

遺跡の名称

- |           |          |         |           |
|-----------|----------|---------|-----------|
| ① 中道南     | ② 桜 煙    | ③ 久保田   | ④ 塚 煙     |
| ⑤ 高 根     | ⑥ 北 割    | ⑦ 田 代   | ⑧ 古 屋 敷   |
| ⑨ 金 鑄 場   | ⑩ 上 溝    | ⑪ 藏鹿山麓  | ⑫ 経ヶ岳山麓   |
| ⑭ 西笠輪小学校北 | ⑮ 伊那養護学校 | ⑯ 熊野神社  | ⑰ 在 家     |
| ⑰ 大 萱 西   | ⑯ 殿 屋 敷  | ⑰ 宮 垣 外 | ⑳ 天 庄 1   |
| ㉑ 天 庄 2   | ㉒ 上 戸    | ㉓ 富士垣外  | ㉔ 掘 の 内   |
| ㉔ 小 花 岡   | ㉕ 中 の 原  | ㉖ 下 の 原 | ㉗ 与 地 山 手 |
| ㉘ 与 地 原   |          |         |           |

## 第Ⅰ章 中の原、古屋敷遺跡の環境

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代			弥生時代			古墳時代			奈良時代	平安時代	中世	備考 (長野県遺跡 地図番号)
				草	早	前	中	後	晚	前	中	後				
1	中道南	西箕輪吹上				○										
2	桜畑	〃				○										
3	久保田	大泉新田			○							○				
4	深畑	〃			○							○				
5	高根	〃				○										
6	北割	羽広			○					○						(2602)
7	田代	〃			○					○						(2601)
8	古屋敷	〃			○					○						(2600)
9	食鉢場	〃			○								○			(2599)
10	上溝	〃				○○				○	○○○○○		財本と同じ			
11	藏鹿山麓	〃	○													
12	経ヶ岳山麓	〃											○	和鏡		
13	西箕輪小学校北	大萱									○					
14	伊那養護学校	〃 8274	○								○					
15	熊野神社	〃			○						○○					(8678)
16	在 家	〃 7438～7444外			○											(8679)
17	大萱西	〃	○		○											
18	殿屋敷	梨ノ木			○						○○					(2608)
19	宮垣外	中条			○○						○○○○					(2607)
20	天庄1	上戸			○						○○					(2606)
21	天庄2	〃			○											
22	上戸	〃			○											
23	富士垣外	中条			○											
24	堀之内	〃			○											
25	小花岡	花岡			○○						○○					(2605)
26	中の原	中の原			○											
27	下の原	上戸			○											
28	与地山手	与地			○											
29	与地原	〃			○											(2609)

第1表 西箕輪地区遺跡一覧表

## 凡 例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なり、県営畠地帯総合土地改良事業で、第3次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和50年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後の機会にゆずることとした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野 良一 小池 政美

◎ 図 版 作 製 者

・遺構および地形

小池 政美 友野 良一

・土器拓影および実測図

小池 政美 友野 良一

◎ 写 真 撮 影

・発掘および遺構

小池 政美 友野 良一

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

## 目 次

### 序

凡 例 .....	(5)
目 次 .....	(6)
挿図 目 次 .....	(7)
表 目 次 .....	(7)
図 版 目 次 .....	(7)

第Ⅰ章 発掘調査の経過 .....	(8~10)
-------------------	--------

第1節 発掘調査の経緯 .....	(8)
第2節 調査の組織 .....	(8~9)
第3節 発掘日誌 .....	(9~10)

第Ⅱ章 遺 構 .....	(11~14)
---------------	---------

第1節 住 居 址 .....	(11~14)
-----------------	---------

第Ⅲ章 遺 物 .....	(15~16)
---------------	---------

第1節 土 器 .....	(15)
第2節 鉄 製 品 .....	(15)

目 次

插 図 目 次

第1図 西筑輪地区遺跡分布図 .....	(3)
第2図 地 形 図.....	(11)
第3図 遺構配置図.....	(12)
第4図 第1号住居址実測図.....	(13)
第5図 第2号住居址実測図.....	(14)
第6図 土器実測図.....	(16)
第7図 鉄製品実測図.....	(16)

表 目 次

第1表 西筑輪地区遺跡一覧表 .....	(4)
----------------------	-----

圖 版 目 次

図版1 遺跡全 景
図版2 遺 構
図版3 遺構及び遺物出土状況
図版4 遺物出土状況

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は伊那市竜西地区を区画整理する大規模な事業であります。当西箕輪地区は昨年度より実施され、本年度に於いては中条地区で中の原遺跡、羽広地区で古屋敷遺跡の2つが該当し、秋の収穫後に着工する運びとなった。

西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）の遺跡の調査を委託された場所は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心に、中の原遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

9月18日、南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

### 第2節 調査の組織

#### 中の原遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢總一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	向山 雅重	長野県文化財専門委員
"	木下 衛	上伊那郡教育会会长
"	原 益久	南信土地改良事務所長
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	石倉 俊彦	" " 課長補佐
"	井上のり子	" " 主事

## 発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
"	御子柴泰正	"
調査員	小池 政美	"
"	辰野 伝衛	"
"	福沢 幸一	"
"	赤羽 義洋	国学院大学学生

## 第3節 発掘日誌

昭和50年11月1日 発掘器材を運搬し、明日からの発掘に万全を整えるようにした。器材運搬に際しては、霜柱が立ち、しかも、その上にブルトーザーが走ったというような悪条件が重なり仕事が極めて難渋であった。

昭和50年11月4日 一応、遺跡地と指定されている最東端にグリットを設定し、それを掘り下げるが、遺物らしきものは何も発見されなかった。

昭和50年11月5日 昨日に引き続き、グリット設定地区を掘り下げてみるが、遺物らしきものは何も発見されなかった。

昭和50年11月6日 一昨日、昨日と2日間掘ってはみるが、何も発見されなかつた。本日は何か出土するのではないかと期待をもって、調査に取りくんでみると何も検出されなかつたので、三日間掘ってみて、土器が一つずら出土しなかつたので、期待は極めて希薄と考えて、調査を断念した。



昭和50年11月10日 遺跡

発掘風景

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

地に指定された最西端に、とっこどっこ数カ所グリット掘りを実施してみると、グリットを数カ所あけた内で、最東端と思われる位置に須恵器の破片が多量に出土した。発掘を始めて以来、数日ぶりに見る土器片であった。住居址への望みを持ち住居址のプラン確認に全力を注ぎこむ。

昭和50年11月17日 住居址のプラン確認に全力を注ぎこむ。付近一帯を拡張し、その土量の多いのには驚嘆するほどであった。ローム層までの深さは約1m 前後にまで及んでいた。

昭和50年11月18日 第1号住居址のプラン全体を把握した。すると、第1号住居址の南西の隅に黒々と落ち込みが発見され、これを第2号住居址と命名した。

昭和50年11月20日 第1号住居址の掘り下げを開始する。掘り下げていくと思ったより多量の遺物が発見された。土師器、須恵器、吹子等が主たるものであった。本日をもって第1号住居址の完掘を終える。

昭和50年11月21日 第2号住居址の掘り下げ、並びに完掘を済ませる。第2号住居址の調査をもって、中の原遺跡の発掘作業を終了する。

昭和50年11月22日 第1、第2号住居址の実測及び写真撮影をする。発掘器材のあとかたづけをする。

(小池 政美)

## 第Ⅰ章 遺構

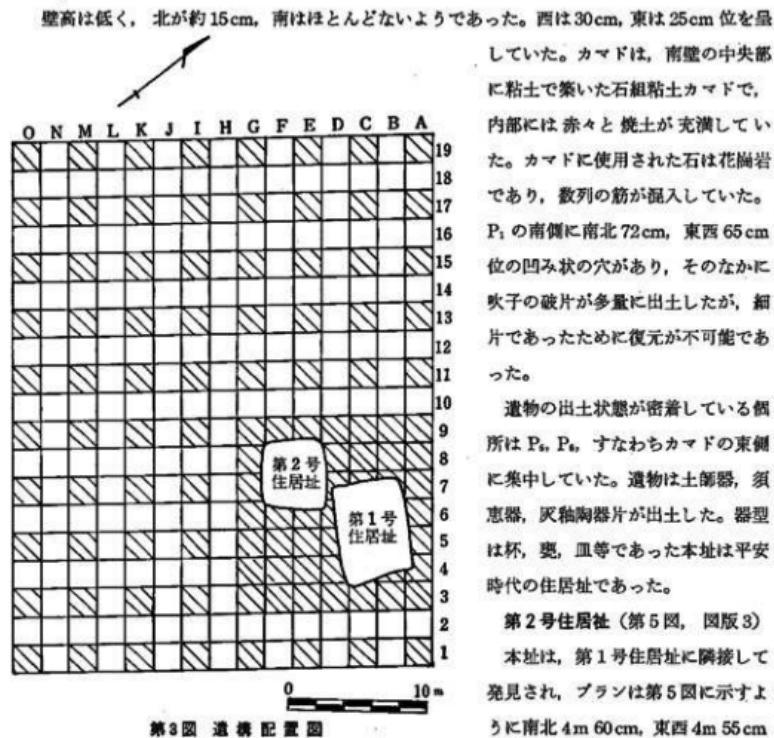


第2図 地形図

## 第1節 住居址

## 第1号住居址（第4図、図版2）

プランは、第4図のように図示した如く、南北6m 10cm、東西6m 20cm程の隅丸方形の堅穴住居址である。現地表面から床面までの深さは約90cm位で、その間の土層は約70cm位が黒色土、ついで20cm位の茶褐色土である。床面は、固められている。主柱穴と思われるものは、P<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>であり、その形状はP<sub>4</sub>はつぶれた円形状で、他は円形に近い。これらの主柱穴の大きさや深さの計測値は実測図の示す通りである。

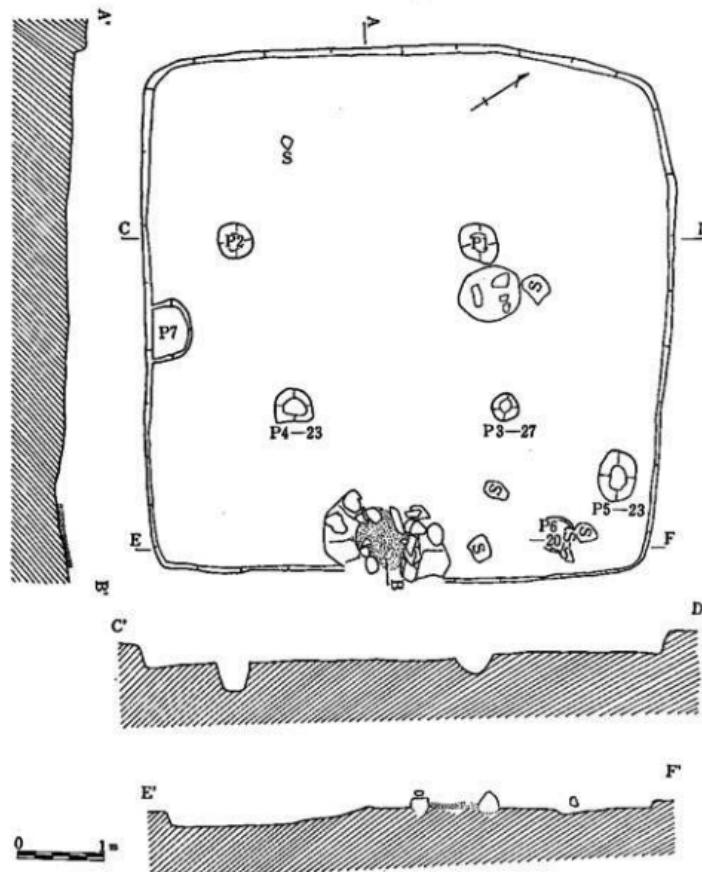


第3図 遺構配置図

第Ⅱ章 置 構

位の隅丸方形の堅穴住居址である。床面の大部は、固められていたが、北壁に近い部分と北西隅には軟弱な部分が見られた。床面のレベル差は大般水平であった。

壁高は内傾が著しく、高さは北は40cm、南は45cm、東は35cm、西は40cm位であった。床面上には主柱穴は、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>の4ヵ所であり、P<sub>1</sub>はコーナーに密接していないが、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、



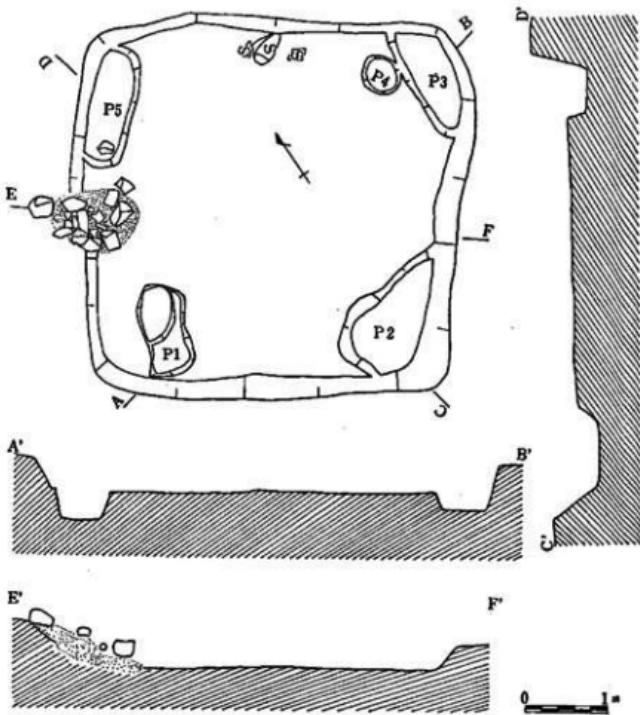
第4図 第1号住居址実測図

P<sub>3</sub>はコーナーに密接している。

カマドは、西壁の中央部付近にあり、壁面を約40数cm位掘り込んで粘土で築かれており、両袖は、住居址内に約50cm位張り出していた。これの構築された範囲は壁外に約40cm位出ていた。カマドに使用された石は大部分が変成岩や粘板岩が主体をしめていた。カマドの傾斜はカマドとしてはかなり急傾斜の状態を呈していた。粘土の検出された状態は石の周辺に集中していた。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器片で、器型は杯、甕、皿等であった。よって本址は平安時代の住居址と考えられる。

(小池 政美)



第5図 第2号住居址実測図

## 第Ⅲ章 遺 物

### 第1節 土 器 (第6図、図版3~4)

(1~3) は第1号住居址、(4~5) は第2号住居址で出土した土器であり、器型としては(1, 4) は杯、(2, 3, 5) は皿である。(1~2, 4~5) は内黒、1は底部が糸切りになっている。(1~5) のすべてにロクロによる仕上げが加えられている。(2~3, 5) は高台が付っている。

1は口径13.1cmで、口唇部はやや内傾気味を呈する。2は口径14.3cmのやや大型品で、底部付近は極めて厚くなっている。3は口径14.1cmで、口唇部の頂が比較的平坦になっている。4は口径15.5cmで、ロクロの整型が五つのうちではもっとも顕著である。5は口径12.7cmで最も皿に近く、高さは2cmであった。

### 第2節 鉄 製 品

本遺跡出土の鉄製品としては、鉄製鎌、刀子と板状鉄製品の出土をみた。

#### 鉄製鎌 (第7図、図版4)

第1号住居址からは鉄鎌、刀子、板状鉄製品等の出土があった。1の鉄製鎌は、鉄板の先を折りかえしてつくったもので、現長は約6.3cm、幅約2.2cmを計測し、全体的にかなり腐蝕している。下部は欠損してしまっている。刃の保存状態は良好であった。

#### 刀 子 (第7図、図版4)

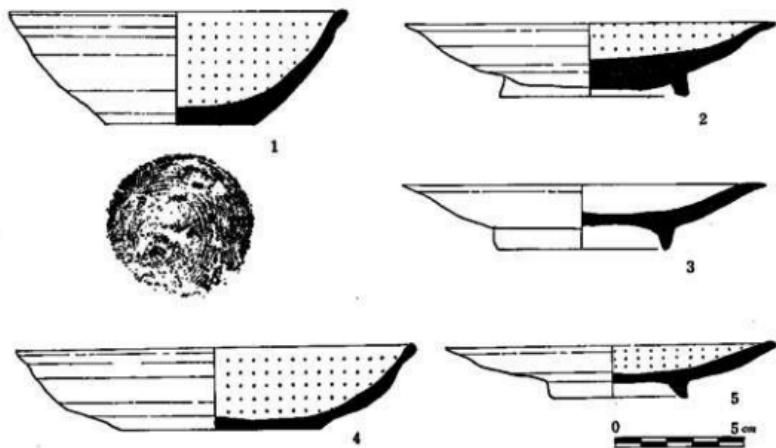
2の刀子は1点だけ出土し、保存状態は極めて良好である。現長は8cm、幅は1cmを算し、柄に使用したと思われる木質部が残存している。

#### 板状鉄製品 (第7図)

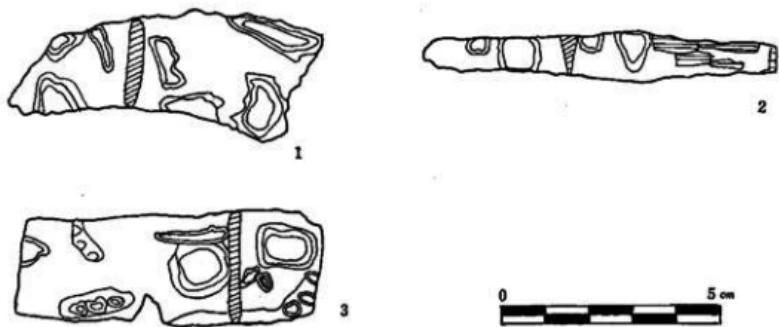
3は板状の鉄板を幅2.5cm、長さ7cm位に切り取ってつくられたものと思われる。厚さは、3mm程度を測定できる。鉄板下部中央部付近は腐蝕のために内側へ三角形状に欠損している周縁は加工された形跡はない。

(小池 政美)

第三章 造 物



第6図 土器実測図



第7図 鉄製品実測図

# 図 版

図版1 遺跡全景



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を西側より眺む

圖版2 造  
構



遺構配置



第1号住居址



第2号 住居址



吹子



灰釉陶器

圖版4 遺物出土狀況



土師器



土師器



土師器



須恵器



鐵



刀子

古屋敷遺跡

## 凡 例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なう、県営畠地帯総合土地改良事業で、第3次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和50年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野 良一 小池 政美

◎ 図 版 作 製 者

・遺構および地形

小池 政美 友野 良一

・土器拓影および実測図

小池 政美 友野 良一

◎ 写 真 撮 影

・発掘および遺構

小池 政美 友野 良一

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

## 目 次

序

凡 例 .....	(2)
目 次 .....	(3)
挿 図 目 次 .....	(4)
図 版 目 次 .....	(4)

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	(5~7)
------------------	-------

第1節 発掘調査の経緯 .....	(5)
第2節 調査の組織.....	(5~6)
第3節 発 掘 日 誌.....	(6~7)

第Ⅱ章 造 構 .....	(8~10)
---------------	--------

第1節 土 拂 .....	(9)
第2節 柱 穴 群 .....	(9~10)

第Ⅲ章 造 物 .....	(10~11)
---------------	---------

第1節 土 器.....	(10~11)
--------------	---------

第Ⅳ章 ま と め.....	(12)
----------------	------

目 次

挿 図 目 次

第1図 地 形 図 .....	(8)
第2図 遺構配置図 .....	(9)
第3図 第1号土壙及び第1号柱穴群 .....	(10)
第4図 出土土器拓影 .....	(11)

圖 版 目 次

図版1 遺跡全景

図版2 遺 構

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は伊那電西地区を区画整理する大規模な事業であります。当西箕輪地区は昨年度より実施され、本年度に於いては羽広地区で古屋敷遺跡、中条地区で中の原遺跡の2つが該当し、秋の収穫後に着工する運びとなった。

西部開発（県営畑地帯総合土地改良事業）の遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心に、古屋敷遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて事務を遂行することとした。

9月18日、南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

### 第2節 調査の組織

#### 古屋敷遺跡発掘調査会

##### 調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委 員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	向山 雅重	長野県文化財専門委員
"	木下 衛	上伊那教育会会长
"	原 益久	南信土地改良事務所長
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	石倉 俊彦	" " 課長補佐
"	井上のり子	" " 主事

## 発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会員
"	御子柴泰正	"
調査員	小池 政美	"
"	辰野 伝蔵	"
"	福沢 幸一	"
"	赤羽 義洋	国学院大学学生

## 第3節 発掘日誌

昭和50年11月25日 羽広地区の古墳敷遺跡へ発掘器材を運搬し、当地に到着次第テント設定に着手する。広大な面積なので、遺跡地の中心部をつきとめるために、ところどころにグリット掘りを実施する。

昭和50年11月26日 昨日、実施したグリット掘りの状況によりグリット設定をした。その名称は南北にA-0、東西に1~15とつけ、一区画を面積4m<sup>2</sup>とする。グリット設定後A1より一つおきに南、西へと進めていた。A1の周辺のグリット内より縄文中期土器片が数片ではあるが出土した当初よりあまり期待を持てなかった遺跡だけに発掘初日よりの土器出土は我々を夢中にさせる何かの魅力があった。

昭和50年11月29日 グリット掘りを昨日に引き続いて進行させていくとB5に黒土の変色部分が発見され、皆んなで一齊にその付近の拡張に熱中して作業をしたので、思ったより能率向上に役立ち、午後の仕事終了時間までにはその全体の形容が明らかとなっ



発掘風景

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

た。これを一応、第1号土塗と名前をついた。土塗を拡張していく時点で気付いたことであるが、土塗の周囲に柱穴がみられ、当時にこれを第1号柱穴群として、本日の作業終了をみた。

**昭和50年12月1日** 昨日、検出された第1号土塗と第1号柱穴群の掘り下げを開始する。一層、一層、皮を剥ぐような方法で掘り下げていくが、本日のところでは覆土内よりは何も出土しなかった。掘る人達も朝のうちは掘る手にも勢いが感じられたが、夕方近くには一種の落胆の雰囲気が漂っていた。

**昭和50年12月2日** 一夜、明けてみると、あたり一面に霜柱が広がっていた。遺跡地も前述した状況で、昨日、遺構の部分にシートをかけておいたが、その下にも霜柱があった。日一日と冬将軍の足音が聞えてくるようで、一日も早く現場の作業をかたづけたいものだと思わずにはいられなかった。まず、作業の真先に霜柱が溶解して仕事がしにくくなないように、それをとり除くことに主力を注ぐ、それが終了後、昨日と同じように土塗と柱穴群の掘り下げを進めていく。昨日よりも土量が少なくなるので作業員を減らし、あまたの作業員達には他のグリット掘りの方へいってもらうことにする。本日もまた遺物の出土は全くなかった。ただ少量の炭化物の検出をみたので、遺構には相違ないことが確認できた。

**昭和50年12月3日** 第1号土塗と第1号柱穴群の掘り下げを実施する。両遺構とも最終段階に近いが遺物の出土は何もみられなかった。

**昭和50年12月4日** 第1号土塗と第1号柱穴群の完掘を終え、写真撮影をする。

**昭和50年12月9日** 第1号土塗と第1号柱穴群の実測図と全測図の作製。

**昭和50年12月10日** テントのとりこわしと発掘器材のあとかたづけを終える。

(小池 政美)

## 第Ⅱ章 遺構



第1図 地形図

## 第1節 土 拾

## 第1号土拾（第3図、図版2）

グリット番号 A5, B5, C5, B6 の4グリット内に該当して発見された土拾である。現地表面より60cm位下った砂礫混合の黄褐色土層を掘り込んだ土拾で、南北90cm、東西2m55cm位の規模で、長円形プランを呈している。

壁高は北側はややなだらかであり、その他はきわめて緩斜面になっている。壁面には経ヶ岳山麓の岩盤疊層になっている粘板岩の微縫がつまっているような状態だった。土拾内あるいは、その周辺に点在している石はいずれも粘板岩質のものであった。状態としては叩きめのような人為的な造作はみられなかった。

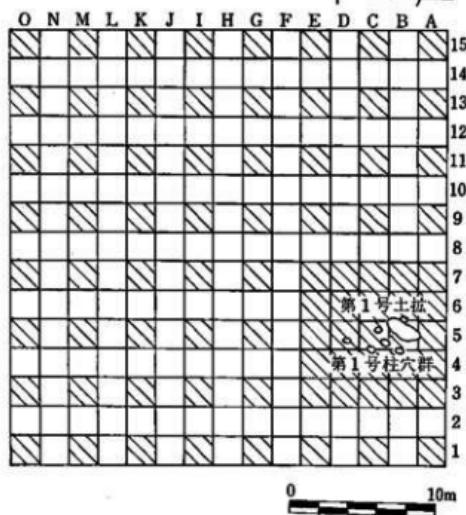
床面は断面図で承知できると思うが、多少の起伏がみとめられた。覆土内より少量の炭化物の検出をみた。遺物は何も発見されなかつたので、時代決定については確定的なものは不可能と思われるが、周囲の遺物より攤文中期時代はたしかなものと思われる。

(小池 政美)

## 第2節 柱 穴 群

## 第1号柱穴群（第3図、図版2）

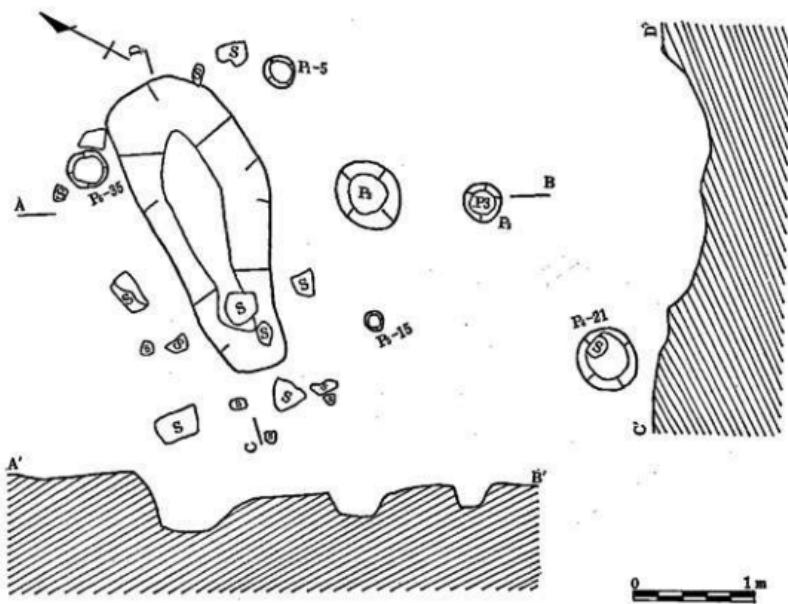
第1号柱穴群は第1号土拾を取り囲むようにして、東側に5ヵ所西側に1ヵ所検出され、前者のはP<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>、後者のはP<sub>5</sub>である。これらの柱穴の直径と深さを順々に記述してみると、P<sub>1</sub>は直径25cm, P<sub>2</sub>は50cm, P<sub>3</sub>は32cm, P<sub>4</sub>は50cm, P<sub>5</sub>は15cm, P<sub>6</sub>は32cmであった。深さはP<sub>1</sub>は5cm, P<sub>2</sub>は20cm, P<sub>3</sub>は18cm, P<sub>4</sub>は21cm, P<sub>5</sub>は15cm, P<sub>6</sub>は35cmであった。柱穴群としては最も関心事である配列はあまり



第2図 遺構配置図

## 第Ⅱ章 遺 様

規則性がなく、しかも柱穴自体が一ヵ所に集中している点より、円錐形の建物の存在が強調されるのではないかろう。



第3図 第1号土器及び第1号柱穴群

## 第Ⅲ章 遺 物

### 第1節 土 器 (第4図)

(1~2) は結節浮隆文を施し、その上に刻目をつけてある。1は黄褐色、2は赤褐色を呈し、焼成は中位である。(3~4) は網文地を沈線によって区画をし、縄文中期初頭独特の籠目状文風を構成しているもの。3は前述した文様の上に破片上部には陰帶をこぶ状に、それから下部にかけて、それを弧状に貼り付けてある。明黄褐色を呈し、雲母、長石を含み焼成は中位である。

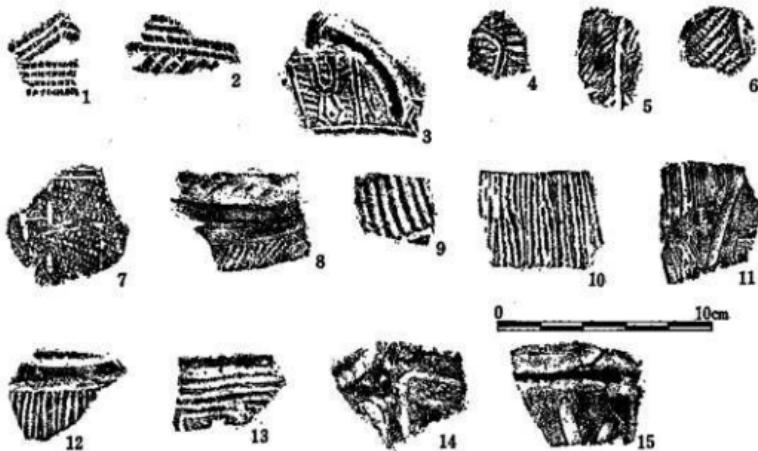
### 第三章 造　物

(5~8) は繩文地が主体文様をなしている。(5~6) は沈線による懸垂文を、(7) は刺突文状の懸垂文、(8) は破片下部に横位の陸帯をそれぞれ加飾してある。

(5~8) の破片全てが明赤褐色を呈している。(9) は拓影には不明瞭であるが、刺突文が無数に入っている。沈線が縦位状に(10~12)、横位状に(13)に施してある。その他に意匠文風に(11) はへう状による沈線と無文部を、(13) は横位状の陸帯を有している(10, 13) は黒色を、(11) は赤褐色、(12) は黄褐色を呈している。(10~13) の焼成は普通である。

(14~15) は破片の大部分が無文部で占められ、その中にわずかに陸帯やヘラによる沈線や刺突文のあるもの。14 は赤褐色、15 は明褐色を呈している。

(小池 政美)



第4図 出土土器拓影

## 第Ⅳ章 ま　と　め

昭和50年11月上旬から開始した長野県伊那市西箕輪地区、中の原・古屋敷遺跡の調査は12月上旬をもって現場での作業は一応の終了をみた。調査開始日は小晴日よりの晴天であったが、発掘終了日近くには冷雪に見舞われその後、幾日か寒風の吹きつづく日が続いた一朝あけて、現場へ行って見れば、シートの下には一面の霜柱が立ち並び、それが溶け始めると、べたついて、作業に多くの困難をきたしてきた。幸いにして何の事故もなく調査が終了したことは、作業員の皆様、調査団の各位、南信土地改良事務所職員の絶大な援助があったなればこそで、深甚なる謝意を表する次第であります。発掘に関しては、とうてい全面発掘という姿は不可能であったが、当初思っていたよりも多くの成果を収めることができたことは誠に喜びに堪えません。

個々の遺跡の内容については、報告書に譲り、ここでは両遺跡の大まかな内容について述べてみたいと思います。

中の原遺跡に指定された区域は約6町歩にわたっているが、今回の調査で遺物密集地区は山麓線上に寄った方が濃厚と思われた。この結論は古屋敷遺跡にもそのまま適用できると確信してもよかろう。

遺構としては平安時代の竪穴住居跡が2軒発見され、住居跡のプランとしては一般的に発見される同時期の住居跡としては極だった特徴は見当らなかったが、ただ2軒の住居跡が密着していたにもかかわらず、カマドの位置は第1号住居跡は東側に、第2住居跡は西側にみられた。この違いは、遺物を正確なる編年のもとに体系づければ、その明確なる時代が究明できる。このことがわかれれば、50年あるいは100年位での風向きの移動が考えられる。

遺物としては土師器、須恵器、灰釉陶器片の相当量の出土をみた。灰釉陶器片は一般的に東濃の傾向が強いようにみうけられた。

第1号住居跡出土の吹子は伊那市内では、西春近謙訪形安岡城、西春近山本常輪寺下遺跡について3番目の出土例となつた。

古屋敷遺跡では、わずかに土塹1というさびしい結果となってしまった。ただ、前述したように遺物発見地区が山麓線上に寄った方にあることが確認できたのは大きな成果と考えてもよいのではないか。

遺物としては縄文中期初頭から縄文中期後葉の広範囲にわたっての土器片の出土がみられた。

(小池 政美)

# 図 版

図版1 遺跡全貌



東側より遺跡地を眺む



西側より遺跡地を眺む



第1号竪穴及び第1号柱穴群（北側より）



第1号竪穴及び第1号柱穴群（東側より）

中の原・古屋敷遺跡  
緊急発掘調査報告書

昭和51年3月15日 印刷  
昭和51年3月20日 発行

発行所 伊那市教育委員会

印 製 所 烏谷市川岸108番地  
中央印刷株式会社

